

韓国の体操選手育成における学校体操部の役割と現状について

The Role and Nature of School Gymnastic Clubs in Fostering South Korean Gymnastic Competitors

中 村 剛 韓 允 洙 田 光子 佐 藤 晋 也
NAKAMURA Tsuyoshi HAN Yoon Soo CHUN Kwang Ja SATO Shinya

In recent years South Korean gymnastic teams have shown outstanding improvement through success at a countless number of competitive events. We ourselves have previously investigated the situation leading to these rapid successes by South Korean gymnastic teams. In that particular study we investigated the South Korean athlete fostering system with the objective of obtaining pointers for application to our own country's methods of fostering athletes. Through the study we were able to identify the existence and content of strategies being employed at a national level for competitor enhancement and for the promotion of competitive sports and also the nature of sports-elite education at physical-education high schools.

However, no matter how advanced any athlete-enhancement schemes or competitive-sports promotion schemes or elite education systems put in place are, without first raising excellent junior competitors for fostering and improvement, these systems will fail to have any significant effect.

As a result this new study analyzes the nature of athlete-fostering by focusing on the elementary and junior high school athletic clubs which, through their actions, support the effectiveness of the elite education at high school athletic clubs as well as national level competitor enhancement policies. In addition we believe that following consideration of the problem that we have in our own country of a shrinking population of athletic competitors, we have been able to obtain some important suggestions in relation to the canvassing of athletes for elementary school gymnastic clubs.

I. 研究目的

近年の韓国男子体操チームの躍進はめざましく、2002年釜山アジア大会の団体と個人総合の銀メダルに始まり、2004年アテネオリンピックの個人総合の銀・銅のメダル獲得など、その活躍は枚挙にいとまがない。我々はこうした韓国体操チーム大躍進の背景を探り、わが国の今後の選手育成のあり方を考えるヒントを得る目的で、その選手育成システムを調査している⁽¹⁾。これにより国家レベルの選手強化策や競技スポーツ振興策の存在とその内容が明らかとなった。しかし、どんな選手強化策や競技スポーツ振興策を整備しても、その制度の対象となる優

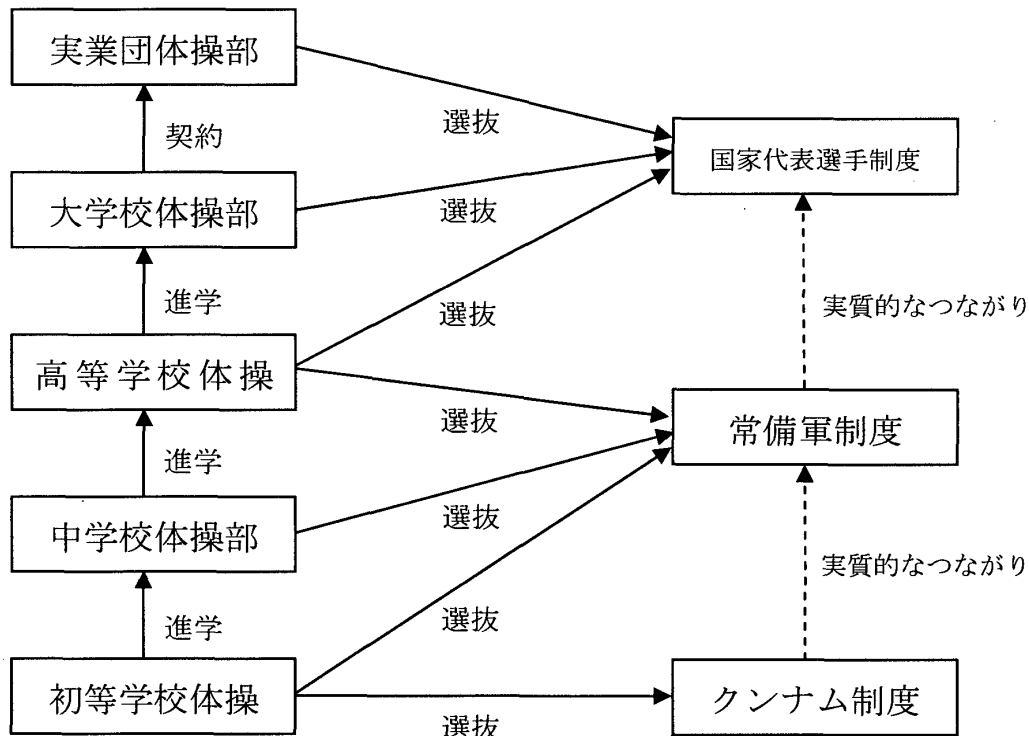


図1：韓国における選手育成システム

秀なジュニア選手が育たなければ、その制度は十分機能しない。韓国には民間経営のジュニア体操クラブは存在しないため、学校体操部が唯一の選手供給源である。図1は韓国の選手育成システムを図式化したものであるが、この図からも分かるように国家レベルの選手強化は初等・中・高等学校体操部によるジュニア選手の育成を基盤として成り立っている。

体操人口が少ない韓国において学校体操部に所属することはエリートスポーツへの参入を意味する。特に高校体操部への所属はトップアスリートへの道を選んだことになる。体操選手を育成している高校は、体育高校か体操指定高校^(注1)である。体操部に所属する学生は、学費が普通高校の1/3程度で、練習道具、遠征の費用など一切必要ない。このような優遇を受けられる学生は、エリート教育を受けることを許された者だけであり、誰もがそうした高校に入学できるわけではない。中学校時代に良い成績を残した者か、将来の可能性が期待される者だけである。こうしたことから、高校体操部におけるエリート教育は、初等・中学校体操部による選手育成を拠り所としていることが浮かび上がってくる。そこで本研究では、国家レベルの選手強化や高校体操部におけるエリート教育の土台を支える初等・中学校体操部に照準を絞り、そこでの選手育成の現状を明らかにする。

上述の通り、韓国には民間経営のジュニアクラブは存在せず、ジュニア選手の育成はすべて学校体操部が担っている。しかしその数は少なく、全国に初等学校体操部は38校、中学校体操部は21校しかない。このため韓国では子どもたちが体操に接する機会が極めて少ない。また学歴社会の韓国では子どもにスポーツをやらせる親は少なく、特に体操はケガの多い種目として敬遠される⁽²⁾。このように韓国におけるジュニア選手の育成は大きな問題を抱えている。しかしこうした状況にも関わらず、韓国は世界で上位を狙える選手をコンスタントに輩出してお

り、そうした成果は数々の困難を抱えながらも地道にジュニア選手を育成している初等・中学校体操部の努力によるところが大きい。このことは我々の先行研究においてすでに示唆されている⁽³⁾。まさに初等・中学校体操部における選手育成が韓国体操界の生命線ともいえるのであり、その現状と問題点を明らかにすることは、韓国体操チームの競技力向上のみならず、体操人口が減少の一途をたどっているわが国の体操界⁽⁴⁾⁽⁵⁾にも多くの示唆を与えてくれる。

II. 研究方法

本研究では韓国の初等学校・中学校体操部の現状を調査する目的で、ジュニア選手の育成において中心的役割を担ういくつかの学校の施設と練習状況を視察し、コーチにインタビューを行った。訪問先とインフォーマントの選定にあたっては、全国少年体育大会(전국소년체전)やPOSCO教育財団会長杯(포스코교육재단 이사장배 대회)の成績を参考にした。

調査は2回に分けて実施した。協力していただいた学校及びコーチは以下の通りである。

第一回調査(2005年9月12日~16日)

〈訪問先〉

- ① トンシン(동신) 初等学校: 施設の視察、コーチへのインタビュー
- ② チャンチョン(창천) 初等学校: 施設及び練習の視察、コーチへのインタビュー
- ③ 浦項製鉄(포항제철) 中学校: POSCO教育財団会長杯の視察、ジュニア選手のレベル調査
- ④ ソウル体育(서울체육) 中高等学校: 練習の視察、コーチへのインタビュー

〈インフォーマント〉

- ① キム・ジョンヨプ(김정엽) 氏: トンシン初等学校体操部コーチ
- ② キム・ジョンス(김정수) 氏: チャンチョン初等学校体操部コーチ
- ③ ファン・ヨンボク(황용복) 氏: 五輪中学校体操部コーチ

第二回調査(2006年3月27日~31日)

〈訪問先〉

- ① チャンチョン初等学校: コーチへのインタビュー
- ② 浦項製鉄中学校: 施設の視察、コーチへのインタビュー
- ③ 大田宣化(대전선화) 初等学校: 施設の視察、大田北(대전북) 中学校の練習視察

〈インフォーマント〉

- ① イム・ジョミョン(임점용) 氏: チャンチョン(창천) 初等学校体操部コーチ
- ② パク・サンゴン(박상권) 氏: 浦項製鉄高等学校体操部コーチ
- ③ キム・ソンホ(김성호) 氏: 浦項製鉄中学校体操部コーチ
- ④ シン・ギジョン(신기정) 氏: 浦項西小学校体操部コーチ
- ⑤ キム・ヨンガップ(김용갑) 氏: 大田北中学校教師兼体操部監督

なお、本文中に出典の断りのない記述は、すべて筆者らが現地におけるインタビューや視察

を通じて採録した情報にもとづいている。

Ⅲ. 調査結果と考察

1. 初等学校体操部における選手育成の現状について

(1) トンシン初等学校体操部の場合

トンシン初等学校ではコーチのキム・ジョンヨプ氏にインタビューするとともに、体操場を見ることができた。この学校はソウル市内の公立学校で、男子選手6名が在籍している。2004、2005年の全国少年体育大会で優勝したソウル市混成チームのメンバーが3名在籍する。

①施設について

体操場はバスケットボールコート程度の大きさで、それほど広くはない。しかし訓練に必要な体操器械が上手に配置されていた。初等学生選手が訓練するにはよい施設だと思われたが、キム氏によれば「よくない施設なので、見せるのが恥ずかしい」とのことだった(写真1)。



写真1：トンシン初等学校

②練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。1日の練習は4～6時間で、その日の選手の調子によって変わる。試合期は規定種目(규정종목)の全習訓練が中心となる。試合のない時期は規定種目の技の練習と基礎体力訓練を行う。規定種目については後述するので、ここでは基礎体力訓練について触れておきたい。

この学校では、基礎体力訓練として腹筋、背筋、平行棒における腕立て伏せなどが行われる。倒立の訓練は、平行棒の練習の待ち時間に30秒1セットで何度も反復させる。また基礎体力訓練として「後方倒立回転とび」の連続なども行う。これらの他に、姿勢訓練も重要な練習内容の一つである。平行棒の支持振動や鉄棒での懸垂振動といった各種目の基本的な運動で、膝やつま先の姿勢を矯正する訓練が頻繁に行われる。

③指導方針について

初等学校の規定種目はいくつかの基本技によって構成されているが、一部の技を予め認められたより高難度の技に変更することによって加点がもらえるようになっている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。例えば、ゆか運動の第一タンブリングの最終技は「後方かかえ込み宙返り」だが、これを「後方宙返り1回ひねり」、あるいは「後方宙返り2回ひねり」に変えることによって加点がもらえる（ただし、これらの技以外への変更は認められない）。この学校では、才能のある子どもには規定種目に入れることのできる最も難しい技（後方宙返り2回ひねり）を教え、まだ発達段階の子どもには最も簡単な技（後方かかえ込み宙返り）を指導する。ここでは、どんなに才能がある子どもでも、規定種目に入れることのできない技は教えない。それは小学校のうちは基礎・基本を大切に、きれいな姿勢で技をさばけるようになることを何よりも優先しているためであり、「難しい技は年齢が上がってから身につければよい」という考えによるものである。

④選手発掘について

ここでは選手発掘のために、一般学生向けに体操の授業を行っている。キム氏は初等学校の教員ではないため、1～4年生までの体育の授業時間を一部譲り受けるかたちで、子どもたちが体操に接する機会を設けている。もともとこのような時間はなかったが、選手確保のために学校側に願い出て作ってもらったのである。こうした授業は年に2回ずつ行われる。

また夏休みや冬休みの前には、親に対して家庭通信文を出して体操をやりたい子どもを募集している。キム氏の話では、体操部には10名ほどの選手がいるのが理想で、6名では少なすぎるという。選手の確保には並々ならぬ苦労があるようである。

(2) チャンチョン (창천) 初等学校の場合

チャンチョン初等学校ではコーチのキム・ジョンス氏にインタビューするとともに、練習を見ることができた。この学校もソウル市の公立学校で、男子5人女子2人のクナム選手^(註1)が在籍する。男子選手1名が2005年の全国大会のソウル市混成チームのメンバーに選ばれている。アテネオリンピック銅メダリストのヤン・テヨン (양태영) 選手の出身校でもある。

①施設について

前述のトンシン初等学校の体操場よりも少し狭いが、体操器械が上手に設置されている。子どもの練習施設としては器具も豊富で、申し分ないように思われたが、キム氏によれば「この施設は良い方ではない」とのことだった（写真2）。

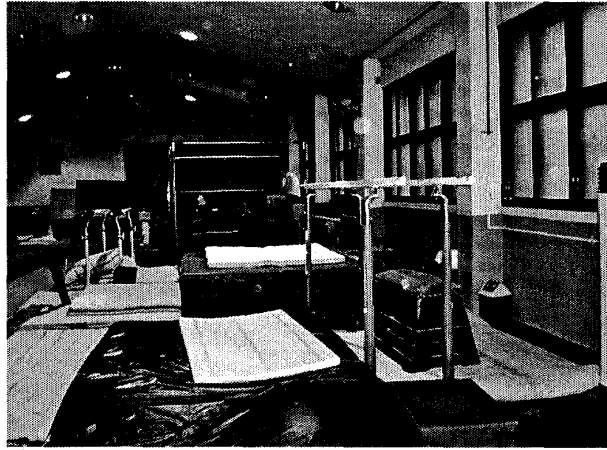


写真 2：チャンチョン初等学校

②練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。時期によっては隔週で土曜日が休みになる。1日の練習は4時間程度で、長くても5時間以上はやらない。試合期は規定種目の全習訓練が中心で、試合のない時期は基礎体力訓練と姿勢訓練を行う。ここでは基礎体力訓練として、ゆか運動の「前方倒立回転とび」の連続や「後方倒立回転とび」の連続など、基本技の反復練習をやらせる。前述のトンシン初等学校では基礎体力訓練として腹筋や背筋、腕立て伏せなどをやらせるとのことだったが、ここではそうした筋力トレーニングは試合のあるなしにかかわらず毎日やる運動であり、試合のない時期の基礎体力訓練とは区別している。ただしトンシン初等学校でも、基礎体力訓練として「後方倒立回転とび」の連続をやらせると言っていたことから、韓国の指導者がよく口にする「基礎体力訓練」には各種目の基本技の反復による専門体力の養成をねらったものも含まれるようである。いずれにせよ、この学校でも試合期は規定種目の練習、オフシーズンは基礎体力訓練と姿勢訓練というかたちで年間の練習計画が組まれている。

③指導方針について

この学校でも規定種目の技を中心に指導している。つまり規定種目において加点のもらえる技の習得を目標としているのだ。この点ではトンシン初等学校のコーチと考え方は同じである。しかし、キム氏からは少し違う意見も聞くことができた。彼曰く、「基礎は確かに大事だが、個人の能力を伸ばすことの方がもっと大事であり、能力のある子どもには指導者の判断で高難度の技を教えるべきだ」という。しかしこの発言は初等学校の時点で高難度の技を試合で実施させるべきだという意味に理解してはならない。この学校の練習内容や彼のインタビューへの回答などから判断するに、難しい技を教えるということは、あくまでも将来を見越したものであって、能力のある子どもはあえて成長を抑制することなく、無理でなければ高度な技を経験させてもよいのではないかという程度の意味の発言として受け止めるべきだと思われた。

④選手発掘について

ここでも選手発掘の目的で一般の学生向けに体操の授業を実施している。キム氏も学校の教

員ではないため、学校側の協力を得て週に2回1時間程度の体操の授業を放課後の活動（特別活動）^(註2)として行っている。その際には両親に案内文を送って許可を取る。1回の授業に10名程度参加するが、この授業の対象者は1年生～3年生である。ちなみにこの初等学校の体育の授業ではサッカーなどの球技が多く、体操の授業はほとんど行われぬ。つまり、この特別活動は子どもたちが体操に触れる数少ない機会なのである。

またこの学校では、選手勧誘の場として西部教育庁杯初等学校体操大会（서부교육장배 초등학교 체조대회）という催しを活用している。教育庁杯とは、体操選手の発掘と体操の普及のためにソウル市教育庁の管轄で行われる運動会のようなもので、そこではかけっこや柔軟競争などが行われる。この大会で体型の良い子どもや体の柔らかい子ども、足の速い子どもなどを勧誘する⁽⁷⁾。その際、親の説得が重要で骨が折れる。キム氏によれば、教育庁杯はソウル市独自のもので、全ての地区で行われているとのことだった。教育庁杯でスカウトした子どもは、もともと他の学校に通っているため、最初は体操部の練習だけに通ってくるが、たいていの場合この学校に転校してくる。このように他の学校の生徒を勧誘しなければならないのはこの学校の特殊な事情による。この学校は1学年に2クラスしかないため、自分の学校だけでは選手の確保が難しいのだ。ちなみに前述のトンシン初等学校は1学年6～7クラスであった。

（3）浦項西初等学校の場合

浦項西初等学校ではコーチのシン・ギジョン氏にインタビューすることができた。その際、中学校コーチのキム・ソンホ氏と高等学校コーチのパク・サンゴン氏にもインタビューすることができた。また同校の体操場を視察することもできたが、練習を見ることはできなかった。この学校は慶尚北道の浦項市にあるPOSCO教育財団^(註3)が経営する私立の学校である。同財団はこの学校の他に浦項製鉄中学校、浦項製鉄高等学校を系列校として運営している。初等学校体操部は、中学校、高等学校体操部と一緒に練習している。

公立の学校体操部が市の教育庁の予算で運営されているのに対して、ここは教育財団の予算と教育庁の予算で運営されている。例えば公立中学校体操部の年間予算が普通300万ウォン程度なのに対して、初等・中・高等学校体操部の予算の合計が3000万ウォン以上ということだから、経済的にかなり恵まれていると言える。初等学校から高等学校までの選手を見る指導者は15人で、その中にはロシアから招聘した外国人コーチも含まれている。

この財団はPOSCO教育財団理事長杯というジュニアの大会を年に一度開催しているが、参加選手の費用は全て財団がもつ。またPOSCOグループは大韓体操協会のメインスポンサーであり、ヤン・テヨン選手が所属する企業でもある。このように、POSCOグループは韓国体操界の発展に大きな役割を果たしている企業の一つである。

①施設について

体操場は中学校の敷地内にある。ソウル市内の学校の体操場に比べてかなり大きい。体操場はPOSCO教育財団理事長杯のときには試合会場として使用される（写真3,4）。体操場にはピ

ットが2カ所設置されており、ゆか、跳馬、鉄棒、段違い平行棒の練習ができるようになっている。ゆか運動用のカーペットも1面設置されており、男子の平行棒が高低合わせて4台、鉄棒が高低合わせて3台、あん馬3台、その他ボック、円馬等の補助練習器具多数、段違い平行棒が2台、単バー1台などが常設されており、体操器械は充実している。器械・器具はそのほとんどが教育財団の資金で購入されたものであるが、慶尚北道の教育庁や体育会からも援助が出ている。体育館は2階建てで体操場は2階にある。1階には全面鏡張りになったダンス室やシャワー室、指導者控室があり、体操部の学生が生活する寮も用意されている。

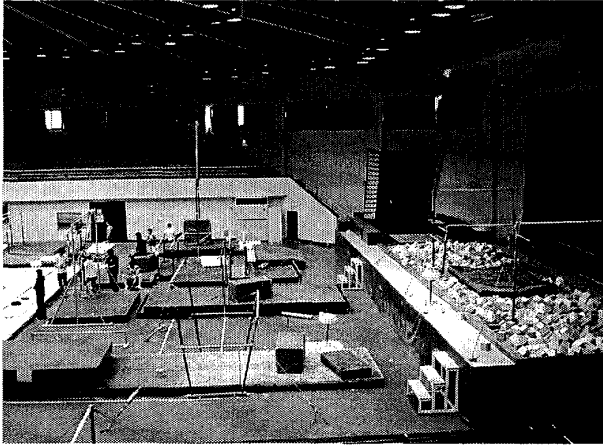


写真3：浦項製鉄中学校①

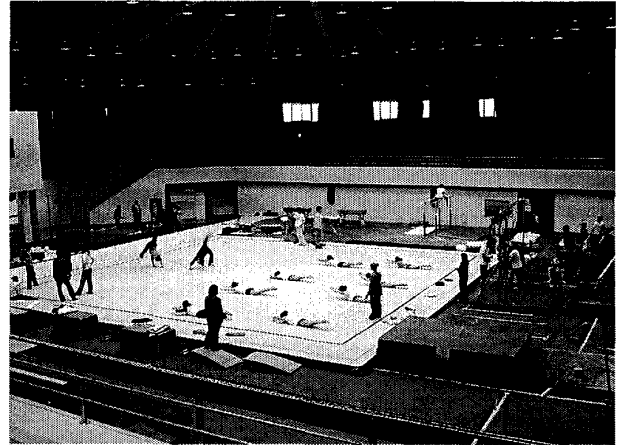


写真4：浦項製鉄中学校②

②練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。試合期は4年生以上の学生のみ日曜日も練習する。選手は午前中だけ授業を受けて、午後から練習をする。1日の練習時間は1～3年生は2、3時間、4～6年生については5、6時間である。

試合期は規定種目の全習訓練とそこでミスをした部分の反復訓練が中心となる。全習訓練は各種目2、3回程度である。失敗した技の反復練習と並行して姿勢矯正訓練や着地訓練をやらせる。この学校でも、試合のない時期の練習は基礎体力訓練と姿勢訓練が中心となっている。しかし、基礎体力訓練の捉え方が前述の2つの学校と異なっていた。パク氏によれば、ここでは基礎体力訓練を一般体力訓練と専門体力訓練に分けて捉えおり、それぞれを高めるトレーニングを分けているとのことだった。基礎体力とは運動選手であれば誰もが身につけるべき基本的な体力であり、いわゆる筋力や持久力、柔軟性といったものだという。上述のトンシン初等学校では、基礎体力訓練として腹筋や背筋、腕立て伏せなどをやらせるとのことだったが、ここではそうした筋力トレーニングは一般体力訓練と捉えられている。一方、専門体力とは平行棒や鉄棒、つり輪といった各種目に必要な特殊な体力のことである。専門体力訓練は種目別に用意されており、指導者たちがスケジュールを組んで、計画的に行われている。専門体力訓練は基本技を用いて行う。平行棒の支持振動倒立の連続や鉄棒の車輪の連続、あるいは前振りひねりの連続などによって、各種目の演技を遂行する上で必要となる特殊な体力を高めるのであ

る。おそらく、この中に「前方倒立回転とび」や「後方倒立回転とび」の連続といった、前述の学校で基礎体力訓練と呼ばれていたものも含まれるのであろう。また、このような練習では同時に姿勢などの矯正も行われる。このようにここでも、試合期は規定種目の練習、オフシーズンは基礎体力訓練と姿勢訓練というかたちで年間の練習計画が組まれている。

③指導方針について

この学校でも規定種目の技以外は一切指導しない。例えば、ゆか運動の終末技は「後方伸身宙返り」であるが、これを「後方かかえ込み2回宙返り」に変えることによって加点がもらえる。第一タンプリングの「後方宙返り2回ひねり」と並んで、「後方かかえ込み2回宙返り」がゆか運動における最高難度の技であるが、ここではこれ以上の技は教えない。また、いくら「後方かかえ込み2回宙返り」まで実施することが認められていても、完璧にマスターするまでは試合で絶対に使わせないとのことだった。

④選手勧誘について

この学校では、数年前から市内およびその近郊11カ所の初等学校の校長と体育部長を招いて、選手発掘のための援助を求めている。また、教育庁の役人を招いて懇談会を開いて選手発掘への協力を要請している。選手の発掘はすべて初等学校コーチのシン氏に任されている。彼が11カ所の学校の体育授業を見て回り、子どもたちの素質や体型を間接的に把握し、さらに運動能力をテストして、体操部へと勧誘する。その際、やはり両親の承諾を得ることが重要となる。親の説得にあたっては、進学の問題、経済的な問題など様々な条件について説明し、了解を求める。例えば、この学校で体操をすれば、系列校への進学が約束されることや、才能のある子どもは体操という特技を活かして大学まで進学できること、また訓練や遠征などにかかる費用は全て財団から支給されることなどを説明し、納得してもらう。このように地域の初等学校の授業を視察して選手を発掘するという試みは全国でも例のないものである。

シン氏は勧誘活動の他に、日々の指導はもちろんのこと、遠くから通っている低学年の子どもたちの送迎も担当している。これは両親の負担を少なくするためである。シン氏のこうした日々の努力がこの学校の体操部を支えていると言っても過言ではなからう。

(4) 大田宣花初等学校の場合

大田北中学校体操部について調査する目的で、同校体操部が普段練習をしている大田宣花初等学校を訪問した。その際、大田北中学校のコーチであるキム・ヨンガップ氏からこの初等学校体操部について情報を得ることができた。この学校は、大田市にある公立の学校である。大田女子中学体操部は国家代表選手を多く輩出している名門校であり、大田市は韓国におけるジュニア育成の拠点の一つと目されている。

①施設について

体操場はバスケットボールコートが2面程取れる大きさで、ゆか運動用のカーペットが1面、その他男女の器具がゆったりと配置されている。体操器械は比較的新しいもので、教育庁

の予算で購入したものであるとのことだった（写真5）。

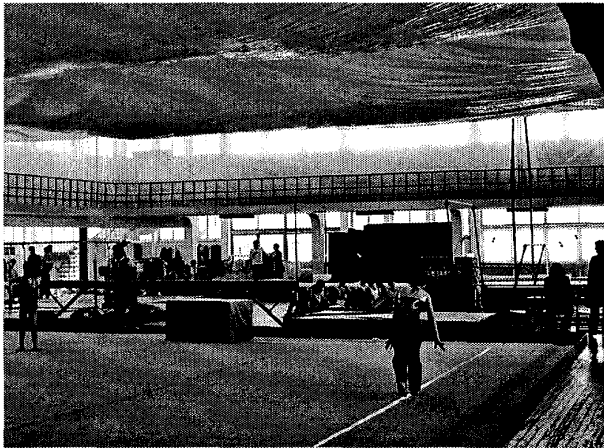


写真5：大田宣花初等学校①



写真6：大田宣花初等学校②

②練習内容について

5・6年生を全国大会に出場させているとのことだったので、規定種目の練習が中心であろう。また初等学生については「基本技しか教えないので、あまり上手ではない」とのことだった。こうした発言から、ここでも基礎・基本を重視した練習を心がけていると推察される。

③選手勧誘について

この学校では選手勧誘のために、教育庁の協力の下、学校長の許可の得られた小学校に家庭通信文を送付している。大田市内の5校が協力している。韓国も少子化が進み、子どもの数が減っている。そうしたなかケガが多い体操は敬遠されることが多い。体型が良い子どもや素質のある子どもを見つけた場合、時間をかけて説得する。その際、訓練に関わる経済的負担はないことや才能がある子どもなので体操をやらせることによって特技学生として進学できることを、両親に話して納得させるとのことだった。

2. 中学校体操部における選手育成の現状について

(1) 五輪中学校体操部の場合

調査では五輪中学校の指導者であるファン・ヨンボク氏にインタビューするとともに、練習を見ることができた。この学校はソウル市内の公立中学校であり、全国少年体育大会で優秀な成績を収めたソウル市代表チームのメンバーを排出している。部員は男子3名で、常備軍の選手が1人在籍している。この選手は全国大会で優勝している。

①施設について

この学校には体操場がないため、近隣のソウル体育中・高等学校で訓練している。

②練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。1日の練習は4～5時間程度である。試合期は各種目の演技の全習訓練と失敗した箇所での修正練習を行う。試合のない時期は基本技の訓練と基礎

体力訓練を行う。練習内容は大きく分けて基礎体力訓練、基本技の訓練、技術訓練の3つである。基礎体力訓練は一般体力訓練のことで、基本技は、あん馬の旋回、平行棒の支持振動倒立、鉄棒の車輪などである。これらの反復練習を基本技の訓練と言っていたことから、いわゆる専門体力訓練のことだと思われる。技術訓練は各種目における高難度の技の練習のことである。

③指導方針について

「指導者として大事にしている考えや影響を受けた先生」に関する質問に対してファン氏は次のように答えてくれた。「チョ・ソンドン先生^(註4)の基本技を大切にする考えに賛成である。中学生のときに基本技をしっかり教えておけば大人になってから伸びると思う。無理に高難度の技をさせるのは良くない。基本的な体力や姿勢が大事だと思う」。このように彼も初等学校の指導者と同様基礎・基本の徹底を重視しており、中学校段階での難度の追求を戒めている。

④選手勧誘について

ここでは、初等学生の試合が終わった9月頃に、男子の6年生選手の在籍する市内の初等学校に出向いて、直接選手を勧誘し、そのあと親の説得を行う。ソウル市内の中学校はだいたいこのような方法で選手の確保を行っているとのことだった。

(2) 浦項製鉄中学校体操部の場合

浦項製鉄中学校はPOSCO教育財団が運営する私立の学校であり、前述の浦項西初等学校の系列校である。この学校は浦項西初等学校と同じ場所で練習をしている。初等学校コーチのシン氏にインタビューする際に、中学校コーチのキム・ソンホ氏にも話を聞くことができた。

①練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。試合が近いときは日曜日も練習を行う。1日の練習は5～6時間程度である。普段は午前中だけ授業を受けて、午後は練習を行う。基本技を用いて行われる専門体力訓練をウォーミングアップで行い、各種目のトレーニングに入る。試合期は自由種目（つり輪のみ規定種目）の全習訓練を2～3本行わせ、ミスをしたところを反復練習させる。こうした練習と平行して姿勢矯正訓練や着地訓練を行う。試合のない時期は専門体力訓練と高難度の技を習得するための基礎づくり（技術訓練）が中心となる。

②指導方針

上述のように、ここでのインタビューは浦項西初等学校、浦項製鉄中学校、浦項製鉄高等学校の指導者に対して同時に行われた。インタビューには主に高等学校指導者のパク氏が回答し、あとの2人が細かい部分を補足するかたちで進められた。したがって中学校指導者のキム氏に指導方針について詳しく聞くことはできなかった。しかしインタビューの様子から、彼らが一人の選手を初等学校から高校まで同じ目標に向かって役割分担しながら育てていることは明白だった。中学校でも初等学校と同様に、きれいな姿勢で技がさばけることを第一に考え、無理に高難度の技をやらせず、基礎・基本を徹底するという方針に基づいて指導が行われてい

ると推察されるのである。ただ、キム氏によれば、中学生になると能力に個人差が出てくるので、個人の能力をどのくらい伸ばせるかということも重要になってくる。そういったところが初等学校選手の指導と大きく異なるということだった。

③選手勧誘について

浦項西初等学校の選手は病気でやめる子どもを除いて、ほぼ全員がこの中学校に進む。そのため中学校では特別な勧誘活動はしない。他の地域では初等学校から中学校に上がるときにやめる選手がいるが、ここでは初等学校の指導者と中学校の指導者が連携しており、ほとんどの子どもが体操を続ける。なかでも、初等学校コーチのシン氏の役割は大きい。より厳しい訓練が必要となる中学校へ進むには、初等学校時代に基礎・基本を身につけさせるための厳しい訓練だけでなく、子どもたちに体操への高いモチベーションを涵養しなければならない。こうした厳しい訓練と体操に対するモチベーションの高揚は、ときに相反するものである。「厳しい訓練をさせながらも、中学校で体操を続けさせるためにどんな工夫をしているのか」という質問に対して、彼は「やはり、つらいとかしんどいとかいって泣いたりする子は多いが、その場合は練習が終わったあとに慰めるようにしている」と答えてくれた。こうした回答からもシン氏の日々の苦勞が伺える。また彼が、毎日指導の前に子どもたちを自宅まで迎えに行き、練習後に自宅まで送り届けていることは先に述べたが、彼のこうした献身的な態度そのものが子どもたちの体操への取り組みを確かなものへと変える上で大きな力となっているのであろう。

(3) 大田北中学校体操部の場合

今回の調査では大田北中学校の指導者であるキム・ヨンガップ氏にインタビューするとともに、練習を見ることができた。この中学校は全国でソウル市代表チーム、ウルサン中学校チームと並んで3本の指に入る強豪である。ここに所属しているペ・ジャキョン（배자경）選手は、小学校5年生から中学校2年生までの間、少年体育大会で金メダルを逃したことがないという。この中学校には2名の常備軍選手が在籍している。

この中学校には体操場はない。練習は大田宣花初等学校の体育館で初等学校の選手と一緒にやっている。ここにはピットがないため、高度な技を練習するときには大田体育高等学校にピットを使わせてもらいに行くとのことだった。

①練習内容について

練習は週に6日で日曜日は休みである。試合が近くなると日曜日も練習をする。平日は午前4時間だけ授業を受けて、午後は2時から9時まで7時間程度の練習を行う。

試合期には各種目の演技の全習訓練と失敗したところの修正練習を行う。全習訓練は1日2回程度で、修正練習に多くの時間を費やす。試合の1ヶ月前になると午前と午後に1回ずつ6種目の全習訓練を行い、そのあとの午後の練習は修正練習を行う。試合のない時期の練習は演技を構成する技の一つひとつ分けて練習する。一般体力訓練は試合期、オフシーズンに関わらず種目の待ち時間に行う。倒立、鉄棒の車輪、つり輪の懸垂振動など基本技の反復練習（専門

体力訓練)とそこでの姿勢矯正訓練にも多くの時間をかける。キム氏は、選手を育てる上でとくに柔軟性を重視しており、日々のトレーニングでは柔軟運動にも力を入れている。

②指導方針について

基礎体力訓練と姿勢訓練、柔軟運動など、基礎的な訓練が徹底されていることから分かるように、ここでも基礎・基本が重視されている。しかしキム氏の考えはそれだけにとどまらない。彼は常備軍制度に対してあまりよい印象を持っていない。それは才能がある選手にはどんどん難しい技を教えていくべきであり、常備軍の合宿訓練では基礎・基本の確認が中心となるため、せっかく覚えかけた技の訓練が中断されてしまうことがあるからだという。こうした発言は普段の練習から基礎・基本を徹底した上で、高難度の技を指導しているという自負の現れであり(このことは1日7時間という長い練習時間からも伺える)、基礎・基本の軽視を意味するものではない。こうしたことは彼がインタビューにおいて初等学校や中学校のつり輪の規定種目による基本技の徹底指導を「好ましい」と語っていることから明らかである。

③選手勧誘について

大田北中学校では選手勧誘のため、大田市内の初等学校を回ることもあるが、基本的には一緒に練習している大田宣花初等学校の選手がそのまま上がってくるため、特別な勧誘活動はしていない。キム氏の話では「韓国では初等学校における選手の確保が難しいのであり、初等学校で体操をやった子どもは70~80%の確率で体操を続けることになる」ので、中学校段階での勧誘よりは、初等学校段階での勧誘を重視しているとのことだった。

3. 考察とまとめ

(1) 初等学校について

施設に関してはソウル市内の学校の体操場は比較的小さく、地方の学校の体操場は広かった。地方の学校の体操場は初等学生だけでなく、中学生や高校生が合同で練習するかたちをとっていた。キム・ヨンガップ氏によれば、教育庁としても何カ所も体操場を整備するより各地方に体操場を1つ造れば、そこを拠点としていくつかの学校が一緒に活動できるであろうという目論見があるという。比較的選手数の多い初等学校に体操場をつくり、専門化に伴い選手数が減る中学校、高校の選手は、そこを拠点として活動してほしいという考えがあるというのだ。

一方ソウル市の初等学校の体操場は各学校の選手が練習するための施設だった。都心部のため学校の敷地面積の関係もあり、それ程大きな施設を造ることができないことや地方に比べて初等・中・高等学校を含め体操場をもっている学校が多いことが関係していると思われる。

練習は全ての学校で週に6日行われており、日曜日が休みなのも共通だった。練習時間はおおそ4~6時間で、内容は大きく分けて規定種目の練習、基礎体力訓練、姿勢訓練の3つからなる。基礎体力訓練は意識的に区別しているのに関わらず一般体力訓練と専門体力訓練の両方を含んでいる。姿勢訓練は基本技における姿勢の矯正訓練であり、徹底されていた。

練習の中心は規定種目である。初等学校では規定種目に入れられる技以外はほとんど教えないのであり、初等学生の指導に対する影響力は極めて大きい。第1回目の調査で、我々はPOSCO教育財団理事長杯を視察することができた。調査当時この試合は、男子選手のみ規定種目で競技されており、女子選手は自由種目で競技されていた。そのため、女子競技ではかなり高度な技が行われていたが、姿勢欠点が多く危険な実施がいたるところで見られた。それに対して男子競技では難しいことをやる選手はいないが、きっちりとした姿勢と安定した動きで演技が遂行されており、安心して見ていられた。こうしたこともあり最近では女子についても規定種目が作られ、初等学校の大会は男女とも規定種目で競技されるようになってきている。このように規定種目は少ないジュニア選手を確実に育てる上で、基礎・基本の徹底や難度偏重の抑制、正しい姿勢の修練、ケガの予防などに大きな力を発揮しているのである。

指導方針としては規定種目の影響が大きく、基本技をきれいな姿勢でさばけるようになること、将来において難しい技を身につけられるように基礎的な体力を養成することに重点をおいているコーチが多かった。そういう意味で規定種目は全国のコーチの指導方針にも大きな影響を与えていると言える。

韓国の初等学校では選手確保のために様々な工夫がなされていた。ソウル市の2つの学校では、体操部のコーチが体操の授業を行うことによって、子どもたちの体操への興味を引くように努力していた。また1つの学校では、教育庁主催の運動会に参加している子どもたちのなかから才能のある子どもを見つけ出し、勧誘を行っていた。一方、地方の初等学校では、教育庁の協力の下、地域の初等学校と連携を取り、優秀な子どもを選抜するというユニークな方法をとっていた。なおこうした勧誘において最も難しいのは両親の説得だという。そこでは子どもに才能があること、体操をやる上で経済的負担はないこと、体操を続けることにより特技学生として大学まで進学できる可能性が高いことなどを条件に粘り強く説得するのであった。

このように都心部にしろ地方都市にしろ、子どもの勧誘に関しては親の説得が大きな壁になっているのであるが、そうした問題を解決する上で、教育庁や学校長の協力は極めて大きな力を発揮するという。学歴社会の韓国においては、教育庁や学校長の勧めることについては理解を示す親が少なくない。教育庁の主催する体操大会で自分の子どもが優秀な成績を収めることは教育熱心な親にとっては好ましいことだし、学校長から体操の才能があると太鼓判を押されることは親にとって大きな喜びとなる。このように教育庁や学校長のお墨付きを得られることによって、勧誘における親の説得も少しは楽になるのである。

(2) 中学校について

今回調査した公立の中学校は独自の体操場を持っていなかった。選手の数が少ない中学校のために独自の体操場をつくるよりも、近隣の施設を使って訓練させる方がよいという教育庁の考えがあることは先に述べた通りである。一方、私立の浦項製鉄中学校は系列の初等学校、高等学校と合同で練習するかたちをとっており、3つの学校が一緒に訓練することを想定した体

操場が準備されていた。このようなクラブは韓国でも珍しく、ここはわが国におけるジュニア体操クラブに近いかたちのものであった。

練習は調査した全ての学校で週に6日行われていた。日曜日は休みであった。練習時間はおおよそ4～7時間であった。練習は主に各種目の全習訓練、基礎体力訓練、姿勢訓練から成り立っていた。初等学校と同様、基礎体力訓練には一般体力訓練と専門体力訓練が含まれていた。基本技を用いた姿勢矯正訓練にも力を入れていた。中学校では高難度の技を身につけさせるための基礎訓練も行われていた。

中学校ではつり輪のみが規定種目であり、他の種目は全て自由演技となるが、基本技をきれいな姿勢でさばけるようになること、将来において難しい技を身につけられるように基礎的な体力を養成することに重点をおいた指導が多かった。しかし、個人差が顕著になる中学校の選手の指導では、選手個人の能力を伸ばすことにも気を配っていた。

ソウル市内の中学校では中学校のコーチが6年生選手が在籍する各初等学校へ出向いて勧誘を行うとのことだった。これは各初等学校が自前の体操場をもっており、それぞれが独立して訓練を行っているためである。それに対して初等学校と一緒に訓練を行っている地方の中学校では、初等学校に所属する選手の大半がそのまま上がってくるため、積極的に勧誘を行っていないことが分かった。そこではむしろ初等学校コーチと中学校コーチが協力して初等学校段階での選手勧誘に力を入れているのだった。

IV. 結論

本研究では、韓国における国家レベルの選手強化や体育高校などにおけるエリート教育の底辺を支えている初等・中学校体操部における選手育成の現状とその問題点を明らかにしてきた。そこでは、まず初等学校段階での選手の勧誘に大きな問題を抱えていることが具体的事例に基づいて確認された。なかでも子どもの親をどう説得するのかということが難点であることが浮かび上がってきた。初等学校ではそうした問題を進学の問題や経済面のことを説得材料として、粘り強く説得することで解決していた。また教育熱心な親が多い韓国では、教育庁や学校長の協力を得たかたちで選手勧誘を行うことによって、そうした問題を解決しようとしていた。このような教育庁や初等学校との連携は、我が国においても参考にするべき点であろう。

一方、韓国では子どもにしっかりと基礎・基本を身につけさせる上で規定種目の導入が功を奏していることが明らかとなった。規定種目は子どもの能力に合わせて変更することのできるもので、個に応じた指導を可能にしながらも、難度偏重の抑制にも役立っている。幼い頃に無理して難しい技を覚えさせようとするともなくなるため、選手の低年齢化による弊害（燃えつき症候群や慢性的な関節障害など）の回避にも有効だと思われる。このような多くの利点をもつ規定種目は、我が国においても参考にするべき良い制度である。高校の規定演技廃止が叫ばれている昨今でこの韓国の規定種目の考え方は一考に値するものではなかろうか。

(本研究は私立大学高度化推進事業学術フロンティア推進事業「北方圏における生涯スポーツ社会の構築に関する総合的研究」の一環として行われた)

注記

- (注1) 古くから体操部を持つ高校で、今なお高校生選手の育成拠点となっている学校である。体操部に所属する学生は体育高校と同じ優遇措置を受けることができる。
- (注2) 初等学校には特別活動と称して放課後に様々なクラブ活動を行う時間が設けられている。体操の他、ボール遊びや太鼓、英語など様々なプログラムが設けられている。
- (注3) 世界屈指の製鉄会社である浦項製鉄を前身とするPOSCOが出資する教育財団である。
- (注4) ソウル体育高等学校の教員で体操部の監督である。韓国の男子選手強化の全体を統括する人物である。韓国における強化システムを構築する際に尽力した人物でもある。

引用・参考文献

- (1) 中村剛・田光子・木内明・山田亮：「韓国における体操選手の育成システムに関する研究」, 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 第43号, 53-67頁, 2005
- (2) 한운수・이필영・최정현・권오석・주영삼: “한국 체조선수의 인구실태와 종목별 참가현황”, The Korea Journal of Sports Science, Vol.16, No. 2, 161-169, 2007
- (3) 中村剛・田光子・韓允洙:「韓国におけるジュニア体操選手の育成システムに関する研究」, 浅井学園大学短期大学部紀要, 第44号, 75-87頁, 2006
- (4) 吉田茂・栗原英昭・松田一如:「体操競技に関する基本調査, 第二報, 全国調査の結果及び提言」, 日本体操競技研究, 第8号, 61-75, 2000
- (5) 松田一如・吉田茂・栗原英昭・荒井迪夫:「体操競技に関する基本調査, 第三報, 社会人・大学生における競技人口の推移とその問題点」, 日本体操競技研究, 第9号, 59-73, 2001
- (6) 사단법인 대한체조협회 남자기술위원회: 2005 년도 남자 초등학교, 중학교 국내채점 규칙, 2005
- (7) 사단법인 대한체조협회 남자기술위원회: 남자 초등학교, 중학교 국내 채점규칙 (2006 년도), 2006
- (8) 서부교육청 체육청소년계: 제2회 교육장배 초등학교 체조대회 채점 기준안, 2001
- (9) 포스코교육재단: 제21회 포스코교육재단 이사장배 전국초·중학교 체조대회 (판프렛), 2005
- (10) 木内明: 韓国における教科カリキュラムの研究(1) — 「教育課程」に見る韓国の体育科授業 —, 北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要第3号, 173-188, 2003
- (11) 木内明: 体育のカリキュラムの改善に関する研究 — 諸外国の動向 — 韓国, 「教科等

の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書（14），国立教育政策研究所，97－115，2003

(12) 김상국：학교체육，무엇이 문제인가？，서울특별시체육회 잡지 시민체육，2003